

グンダグンド修道院から ■ 三宅理一

ティグレ州のアディグラットの手前で横道に入り、エリトリアの方角に向けて急峻な谷を道に沿ってどんどん下っていくと、最後は道が消えてしまい、四輪駆動車でももうこれ以上は進めなくなる。そこで車を降りてさらに尾根を越え谷を下り、3時間ほど歩くとグンダグンドの里に着く。切り立った崖に挟まれた土地なので、まるで地の底に降り立った気分である。それでも川床に沿って緑が広がっており、真黄色なオレンジがたわわに実っている。口を含むと甘みのあるとろとした感触が舌に触れ、山歩きで疲れた体に心地よい。グンダグンドのオレンジはアディグラット周辺では大変なブランド品のようで、毎朝地元の男たちがロバに何箱ものオレンジを積んで町に向けて出発していく。

グンダグンドが有名なのはオレンジだけではない。この土地はエチオピアでも特に名のある僧院で知られており、建築を専門とする身としては、一度は訪れなければならない場所であった。いってみればわが国の高野山みたいなものだが、実際に足を運んでみると、規模はすごく控えめで、川の合流点の深い緑の中に小ぶりの石造りの建築が並んだこぢんまりとした僧院である。今では10人程度の僧がいるだけで、地元の人間たちに支えられてひっそりと生活している。僧院内に起居しているものの、川に沿って僧院の土地があるため、普段はそこで農作業に勤しんでいる。

この僧院の保存修復の話がきたのは、今から4年前、アジスアベバでティグレ文化協会の面々と話をしていた時である。14世紀建立の由緒ある僧院でありながら、地震や洪水で相当の被害を受け、緊急の保護策が必要である、アディグラットの人間たちがその問題に取り組んでいるが、ノウハウも資金もなく如何ともしがたい、と切々と語るその口調に打たれて、この地に足を運ぶこととなった。幸い私たちはメケレを中心とする一帯で1980年代から継続的に調査を行い、相当数の岩窟聖堂のデータベースを作成していたこともあり、そう遠い場所という印象ではなかった。まずは現場ということで、地元のティグレ文化協会のメンバーとともに、いよいよグンダグンドの地に発つこととなった。先に述べたようなルートを辿り、山歩きの末に谷底に緑の里を遠望できる位置に立って、不思議な世界にやってきたと強く感じたことを今でもよく覚えている。

最初の訪問は現況の確認ということで僧院の中庭に一泊し、内と外をくまなく見て回った。雨季になれば鉄砲水がでて、貴重な土地が水に削り取られていく。1960年代の地震でクラックが入った聖堂の壁は崩壊直前であった。僧院の背後に広がる廃墟は僧房の跡で、住む人間がいなくなったため荒れるにまかされている。それでも過去の遺跡ではなく、今でも使われている僧院であり、毎日聖職者が聖務日課と典礼を続ける聖なる場所なのである。

ティグレ地方の岩窟聖堂はラリベラの前身とみなされているが、ラリベラよりも壁画が多く、エチオピア中世の豊穡な視覚世界を今日に伝えている。ところがグンダグンドには絵画らしい絵画は何もない。聖堂の至聖所(マクダス)に一部装飾的な絵画の跡が見出せるが、これは後世に加えられたもので、中世の作品ではない。調べているうちに、この僧院は、そうした装飾的なものを打ち捨てて厳しい戒律に身を捧げるイステファノス派の急先鋒に与し、他の僧院とは異なった建築プログラムに則っていたことが徐々にわかってきた。ヨーロッパでいえば、無装飾を貫いたシトー会のようなもので、ひたすら石を積むことに神学的意味を見出していた。正統派に対抗して人里を遠く離れた谷底に立地したこの改革派の僧院を、歴史的な評価とともに建築的な保護措置を加えて未来に伝えることがわれわれの任務であると妙に納得した。

この僧院の保存修復は、このように始まった。といっても地図すらないところである。結構な時間をかけて事前調査を行い、電子測量によって地図を作り、実測図面を起こし、少しずつその体制を整えていかなければならないので、やたらに手間暇がかかる。地元の人々に一から教える手順を踏まなければならないが、それが遺産を地元に戻す基本なので必ずや通らなければならない道筋である。今の段階はようやく解体修理に入ったところで、これからが正念場である。終了までまだ数年はかかるであろう。小さい僧院ではあるが、その特異な経緯からきわめて価値の高い文化遺産であり、丁寧にことを進めていきたいと考えている。